
迷宮のritual.

レプリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮の ritual .

【Nコード】

N0758A

【作者名】

レプリカ

【あらすじ】

夜の学校に二人の生徒。御柳琉邦と《策士》みやなぎりゅうほう 虚音五十鈴。うつろねいすず その二人の観じる世界描写です。

…特異 特別異なる。

つまりそのままの意味。

《策士》 虚音五十鈴うつろねいすずがそうであるように。

絵を描く、速く泳げる、話が上手、陳腐で駄作なこの私の特異はそういうのとはどこか場所を間違えてしまった。

私は出来損ないなのだ。

汗が顎を伝いびたびた下に落ちる音が聞こえてきそうだ。
ごきり。

関節を外したような小気味いい音が静寂と月の光すら届かない廊下に響く。

暗闇月は死の予兆。

夜9：27 学園内…、がしゃん。

どこかの硝子が派手に割れる音。

まずい。息が続かない。足だってもう1ミリだって進みそうにない。それは《翼手》が翼をしまった音に違いない。すぐ近くにいる。ごき、またあの音。長い渡り廊下の向こうに異形のもの。馬の胴体にこつもつ蝙蝠の翼、そして最後に人の顔。前衛芸術なそいつはこっちを見て気付いた。《ああ、餌があると。》がつん。リノリウムの床を蹴る蹄の音。力強い四本の足が《翼手》自身を弾丸のように加速させていく。じっとしてなんていられない、早急になんとかしないと。

…けど、今こうして馬みたいに奴が迫っているのにもかかわらず膝はかくかく笑い、体は既に息する事すら億劫だ。それでも後ろを向き無理にでも走ろうと努力する。

「あ、」

なんて失態。

脚がもつれ地面に伏してしまった。

月の光がリノリウムの床に私の影を映し出す。

常幻月は甘い血の香。

夜9：30 学園内暗い。

蒙昧で、静かで、痛くて、病んでてまるで海の底みたいに。

一体いつもの学校というのはどこにあって、果たして戻って来るんだろうか。

それとも私がどうかしてしまったんだろうか？世界が変わるとき自分に変容しそれを受容する。

いや、しなければならぬ。

次の瞬間そんな小ささを打ち消す巨大な闇。

そして、だって変容に耐ええないそれらは残らず死に絶えてきたのだから。

だから…私、急速かつ迅速の即ち刹那。

変容し受容せよ。

死という結果を拒否するかぎり。

さあ、早く逃げ迷うな走れ踏み出せ狂ったように。

《策士》たるこの私、今一度考えなさい《翼手》を討つ方法を。状況を確認。

あの子からの定時連絡無し。

体育館の逆側に目標の《翼手》。

曇りガラスから緩やかにそそく月明かりがわずかに《翼手》を照らす。

まだ気付いていない。

いな、気付かせていない。

手元のチェーンマインと呼ばれる連結式敷設地雷を構える。

正面きつて勝てる相手じゃないのは既に十二分に理解している。ぴちゃ。

水がしたたる音？ごり。

《翼手》が何か…。

あ。手が見える。淡い月明かりのなかいつそう白いその物体。なるほどね、食事中ですか。人に似た顔がごりごりとぞぶりぞぶりと肉

を咀嚼する。大きく裂けた口から滴り落ちる何か……吐き気がする。大きく裂けた口から飛び出した腕……何かがマヒしてしまっただのか、それとも私は既に変容したのか、もう何も感じなかった。チエーンマインで爆殺するにはなかなかいいタイミングだ。体育館の中央まで進む。この体育館は掌握している。さて……戦闘が始まれば確実に《結界》が無くなりこちらの存在は敵の知るところになつてしまふ。しかし隙だらけの今を逃すことは策のためできない。幾つにも連結された地雷をハンマー投げの要領で《翼手》に打ち込む。二、三個の地雷が《翼手》の腹部に設置される。バチン。タイマーが起動した電子音が響く。時限式にしないと私の機動では爆発に巻き込まれてしまふからだ。駆け寄りそのまま返してもう一撃。残りを投げ付け振り向きざまに伏せる。そして、ぶしゅつとか、ぶつつか肉を裂く音や血管の破裂する音が爆発と同時に私の鼓膜を震わす。肉を焼きたいやな香り。立ち上がり腰の銀の杭を持つ。やつらは銀以外では死なないのだ。つまり、これを打ち込めば私の勝ち。《翼手》は動かない。破れた腹から内臓がはみ出している。

「さあ、終わりです汚らわしき神の末裔。」

ぎちぎちと歯の根があわない口が痙攣している。

「まったくどうしてしぶいですね。」

胸に杭をあてがう。

先端が肉にへこみを生むのには全体重を載せる必要があった。

、そして、ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアッあらがい。

もがき。辛苦に喘ぐ。《翼手》が叫びとともに立ち上がる。傷口から幾つもの人の腕、脚を模倣したモノが生えてくる。まったく、ぶさいく。これは少々予定外。私は早々に後ろに走る。と、ほんの些細な時間の後で、思考の変換すら出来ない間隙に、背中にかかが触れた。次の瞬間焼け付くような痛み、痛み、痛み。そして弾かれた。なんとか受け身はとったものの壁に体を強かにぶつけた。…速い。

振り向く間もなくひずめが私の顔を風いだ。ぐつと顔だけが地面に引き寄せられる。首の筋が悲鳴をあげた。視界がホワイトアウトを起こし耳鳴りが止まない。体が…まずい、思考が微睡む。

「…先輩。」

あの子の声があった気がした。

右腕が持ち上げられる感覚。

噛まれてる？僅かな痛覚に視界が晴れる。

だから策を講じて晒して結果を出力しなければ。まだ、変容は、間に合う。

「琉邦！御柳琉邦っ！！返事なさい！仕事ですよ。」

制服のポケットに隠したナイフで《翼手》の額を刺す。

浅かったとはいえ肉がすぐに固くなり刃はてこでも抜けなくなる。痛みで《翼手》の身が仰け反る。

「…覚醒してっ！！」

私はあらんかぎり叫んだ。

七つ夜に嗤い。

策士、策に溺れず。

夜9：33 学園内琉邦！ ああ、私の名。

五十鈴先輩、呼んでる？暗い。

けど何だろう熱い。

焼ける。ああ、これは赤だよ。よく知ってる色。こんなに赤いとあれが目覚めそうだ。私の特別。特別な特別。屍タル徒ヲ幾千ヲ討テ伐セヨ恒久的ニ素早ク的確ニ絶対的ニカッ灰塵ヘト壊シテシマエ叫んでる。いつもは無視することにきめてるそいつ。

「かはははは。」

しかし。ああ、可笑しい、まったく死を意識するだけで絶頂を感じそうだよ。私個人の存在が喪失するかも知れないこのスリル。命は大事にしちゃあいけない。大事にしても澱み腐りやがて本当の意味を失う。比較対象が強烈な程に意味は心に灼き尽くというものだ。

…だから死が私の隣で囁く程に胸が高鳴ってしまふ。

「さあ、《翼手》私はまだ死んじやあいないよ。腹に収めたら満足か化物？胸を千切れば殺したことになるのか？甘いよ。なら、いまこうして話しているのは誰であるかな？赤だ、赤が早くみたい。きみはもういい死にたまへよ。」

線に区切ってやる。

乱暴にその辺に手をつ突っ込んでやると肉が裂け光が射す。

薄い皮膜を破り。

肉を裂き外に転がりてた。

造作もない。

奴の体液を拭い奴をみれば苦しそうにもがいている。

腹に何本か腕をあてて傷口をふさいでいやがる。

「いやしいな…もっとあらがえよ、そしてかかってこいよ。私はまだ貴様に喰われた右手がかえってきてないのに。」

まあ、左のみで十分。横目にみるとすっかりぼろぼろの先輩。

「っは！《策士》がへましましたね。」

死なないかぎりはすぐに治るから怪我は大したことになるはしないだろう。

しかし人って奴は脆いからね、気を付けないと。

「さて、《翼手》ばらばらだ。」

そういうと奴も気付いたらしい、顔をあげて私を見る。

恐怖に濁った瞳。

それはこういう言葉を感じさせた。

ナンデイキテルノ？なんとも加虐心を誘ってくれる。まるで小動物の眼じゃないの。

「君にも恐れがあるんだ。」

《翼手》が頭を低く突撃を敢行する。

愚かしいよ、考え無しなんてこの状況では悪手。

自分自身を殺してしまう致命的ミス。

《策士》が満足げに笑っているじゃないか。

あぁっ！つまらんつまらんつまらんつまらんつまらんつまらんつま

らんつまらんつまらんつまらんつまらんつまらん
つまらんつまらんつまらんつまらんまったくの愚図め！

人で十分じゃないか？」

「策には抜かりは許されないわ。琉邦ちゃん、いいえ、《神様》。」

「抜かり？冗談いうなよ。いつだって五十鈴はそうだ。結果奴らが死ぬという事実さえ合っていればいいのだから。抜かりだらけじゃないかよ。」

「疑わなだけでよ《神様》、抜かりなんて無いといつもいつてます。体育館の隅で《策士》は大いに笑った。

哄笑して爆笑して最後にほくそ笑んだ。そして徐々に体を締め付けていく空間。

「さよなら。」

月の光に彩られた蛛の巣のような空間が縮退してくる。

[illegible]

五体バラバラ。

首から下が隣にいたり頭の上に脚があったり。

《翼手》は《翼手》で賽子みたいに細々となつてしまつたり。

「さて、お片付けしませんと。」

五十鈴が嬉しそうにはにかんだ。

なんともまあ可愛らしい笑顔をした。

特異…《特別》がああ、私なんて甘いもんだよと溜め息つく。

私もつられて溜め息ついてしまったよ。

それはひどく暴力的で自虐的。

赤い血流れて嫌になるし、世界にあまなす全ての刃が喉元に突き付

けられる。

それでもなんとか笑っていけそうだ。

ひどく不細工で形崩れ、気に食わないこんな世界だけどまだまだ楽しめそうじゃん。

そう思いながら私は特異気に笑ってみせた。

（後書き）

初作品で二年くらい前に書きました。拙い文章でどう仕様も無いですが短いので暇つぶしくらいになったら至極幸せな事です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0758a/>

迷宮のritual.

2010年12月17日18時51分発行